



社会福祉法人

香川いのちの電話

通
信

第80号

相談電話

みみをかたむけなやみゼロ

087-833-7830

FAX相談

むつんでいちばんしみじみ

087-861-4343

(24時間年中無休)



栴川ダム（塩江町）写真提供 宮 武 則 明

「いのちの電話」のゲートキーパーとしての役割

臨床心理士 川田行雄

密になることが自粛されるウィズコロナの時代にあって、耳元でコミュニケーションできるという、タスクとしての電話がより見直されてきているように思います。そして、人とかかわりが疎外されることによる孤立と、社会が再び動き始めるにあたっての再適応不安の両面から、切実な電話相談も増えているように感じます。

「死にたい」と電話を通して語ってくるコーラーに対して、受容・傾聴・共感というカウンセリングの基本姿勢で、最後のところで人間関係をつくり、孤立というブラックホール＝死を選択してしまう人をつなぎとめていくというのが、まさに「いのちの電話」の使命であるといえます。

しかしゲートキーパーとして、しっかりコーラーをキャッチしてホールドすればするほど、電話を切ることは逆に難しくなります。なぜなら「死」に近づいている人ほど、24時間の寄り添いが必要だからです。原則、一期一会の一定の時間枠のある電話相談にはおのずと限界も生じます。この矛盾をどのように解決すればよいのでしょうか。

この答えは、赤ちゃんで考えるとよくわかります。人はゆっくりと何も考えずに安心して眠れることこそが、生きる力に繋がるのです。「死」を願う人には赤ちゃんと同じように、無条件で寄り添い、食と安らぎをあたえてくれる人

が必要です。そして、この生存する権利は、この世に生を受けたすべての人の権利です。

電話相談はコーラーの話をしっかり傾聴することが大切です。それは、孤立したコーラーに寄り添うためです。電話の向こうで解決不能の問題にひとり苦悶して、「死」の淵にたたずむコーラーに対して、ゲートキーパーとしての役割をはたすためには、しっかりとまず休める場所と寄り添える人につながる必要があること、そしてそうする必要性とそれが権利であるということを、コーラーに伝えることだと思います。

コーラーに寄り添えた相談員の言葉は、コーラーのころにとどきます。「死」から逃れる権利を誰もがもっていること、そして誰かにしっかりとホールドされて、ゆったりと安心して休養することができれば、再生は必ずやってくる。身近に誰もつなげられる人がいない場合は、病院が最も適切な相談機関であり、入院すれば24時間ホールドしてもらえするという、最終かつ新たなスタート地点に立つことにつながる。

これは待ったなしの緊急のケースに対しても、自殺をまず思いとどまらせ、救急車を呼ぶようにうながすことにつながります。

【香川いのちの電話コロナ禍対応報告】

1. コロナ禍対応受信実績

当センターでは、96名の相談員が手分けして日々の活動に従事している。

活動内容は、毎日午前6時から翌朝6時までの24時間対応の通常電話活動、自殺対応フリーダイヤルの相談（全国50センターと共通ダイヤル）で毎月10日実施、2020年6月20日から実施のコロナ禍フリーダイヤル相談は、月曜から（水曜を除く）金曜までの4日間（16時から20時担当）の3種類である。

当センターでは、相談員不足等から深夜の担当時間の空白に苦慮している。ただ、上記の自殺対応フリーダイヤルと、コロナ禍対応フリーダイヤルは、完全実施を実行している。

2. コロナ禍対応相談

コロナ禍相談は2020年3月の6件を最初の受信件数として、毎月30件以上寄せられている。毎月の相談状況は、別表のとおりで、最も多かったのは2020年5月の77件であった。

年度別の相談状況は、2020年度は536件（月平均45件、全相談件数8487件の6.3%）、2021年度（4月～9月の6か月間）は、254件（月平均42件、全相談件数4515件の5.6%）と、平均すると月40件以上の相談状況となっている。コロナ禍で困難を覚えておられる方がまだまだおられ、できるだけ対応している。

3. 悩みの多いコロナ禍問題

当センターは、40年の活動歴があり、多くの方々から様々な問題、悩みを寄せられてい

る。コロナ禍において女性からの自殺志向、生活難、家族、友人との疎外感、精神的病いによる喪失感等を訴えるケースが増加している。相談者からの訴えは様々ですが、そのいくつかを例示します。

- 1、コロナ禍と自殺志向が重なる。胃がん（女性50代）
- 2、コロナ禍のせいで全て台無し、生活保護、生きたくない（男性60代）
- 3、精神病、春馬さん亡くなって私も死にたい。パニック障害（女性50代）
- 4、相談をする人がいない。父母にも言えない、死にたい（男性20代）
- 5、コロナショックで事業がさっぱり。自殺して楽になりたいけど、勇気がない（男性）
- 6、両親からの仕送り、コロナ禍でストップ、精神病、生活保護、仕事ができない、自殺したい（男性30代）
- 7、父との二人暮らし、部屋に閉じこもり、コロナではけ口無し（女性50代）
- 8、夫と離婚。娘と同居。苦痛。コロナ禍で別居できない（女性）
- 9、コロナ禍で友人に会えない、病院に行ってもカウンセリング10分だけ、最近うつが、ひどくなった（女性）
- 10、コロナ禍で先が見えず不安、外に出るのが不安でこわい、夜、眠れなくなった。不安で怖い、夜、眠れなくなった。不安でー（女性）

今後のコロナ禍の推移は予断を許さないが、終息に至るまで、相談員一同、力を合わせて相談活動に努めていく決意をしています。

一コロナ禍の対応受信件数は減少傾向だが、 深刻な状況は持続的—

月別相談件数 コロナ禍相談件数

【令和3年度】

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	合計	月平均
全体件数	793	799	751	739	729	704	4,515	752
新型コロナウイルスに関連する相談件数（内数）	33	47	33	48	53	40	254	42.3

【令和2年度】

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計	月平均
全体件数	687	613	799	797	752	705	707	669	731	705	619	703	8,487	767
新型コロナウイルスに関連する相談件数（内数）	56	77	43	48	51	33	41	35	36	45	39	32	536	44.7

※全体件数 9989=8487+1502（無言件数）

【令和元年度】

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
全体件数	855	868	815	892	806	801	873	734	748	811	756	610
新型コロナウイルスに関連する相談件数（内数）											0	6

※令和元年度全体件数には無言電話の件数は入れておりません。（無言電話件数=1080件）

実施中

いのちの電話

コロナ禍対応
電話相談フリーダイヤル

0120-783-556

【期間】 2021年4月1日～2022年3月31日

【時間】 16:00～20:00

月・火・木・金 曜日



支援者を訪ねて 35

三和電業グループ
三和エコ&エナジー株式会社

取締役営業部長 中村 貴志 様
富田 奈織子 様



— 今日はお忙しい中、お時間を頂戴致しましてありがとうございます。

御社は三和電業グループを構成するグループの一つである三和エコ&エナジー株式会社さんという認識でよろしいでしょうか？

中村：はい、そうです。

— それでは御社の会社設立の頃からの沿革を伺わせて下さい。

前の会社名は三和メンテナンス株式会社で、名前の通りメンテナンス業をやったり、固有のお客様の設備工事などをやらせていただいていたのですが、2012年に国の施策としての太陽光等により発電された全電力量を買取るという全量買い取り制度がスタートした時に、三和エコ&エナジー株式会社に社名変更しメンバーも総入れ替えし、全量買い取り制度をターゲットとしたビジネスを展開する為に、全く新しい会社を作ったのです。今、我々の主力は太陽発電設備工事であり、今年で10年目になります。

— ありがとうございます。御社の沿革がよく分かりました。

ご寄付を長年にわたって頂いており、大変有難く感謝しております。ご寄付は何かきっかけがあったのでしょうか？

富田：きっかけは私の入社の前からでしたか、「いのちの電話」さんに、寄付に行かれていたというお話は伺っていて、前から子供の件で廣田先生には大変お世話になっており、ご縁がありましたので継続させていただいています。

— 今も廣田先生には香川いのちの電話養成講座でお世話になっております。

富田：子供が中学の頃スクールカウンセラーを

されていて、相談することで心が軽くなったり、助言をいただくことで、前に進めました。大変感謝しています。

— そうですか。それは又、ご縁ですね。御社のモットーでしょうか、社会活動（盲導犬を育てる会等）に貢献されているということを知りました。

中村：社員、それぞれが関わりのあるような社会福祉事業的なことをされている所に対して寄付をさせて頂こうということで、社員全員に希望先を出してもらって何の条件も、厳正な審査も無く寄付させて頂くということなのです。それを三和電業グループの各拠点ごとに自由に何箇所か寄付させていただいているのです。

— 地域に密着した社会活動ということですね。有難いです。

「いのちの電話」には長年ご支援を頂いているのです、活動についてのご認識を少しお聞かせ下さい。

中村：詳しくは知りませんので、教えていただけないでしょうか

— では簡単にお話し致します。いのちの電話はボランティア相談員による電話相談で、現在全国に50センターあり、香川いのちの電話もそのひとつです。匿名性、1回性を原則として電話を通して色々な悩み、苦しみを抱えていらっしゃる方からの話をお聞きして、お話しして、その方の変え、しんどさが少しでも楽になるように一緒に考えていきたいと思いますという事が主旨の電話相談です。

— いのちの電話についてどんなイメージをお持ちでしょうか？

中村：最近自殺をする人が、多いでしょ。その様な悩む人ばかりを相手にされるには、いろいろ

ろな事を配慮しながら話さない駄目なので気遣いも相当あるだろうし、高度な会話をされるのだろうと感じますね。お話の仕方が、ああしなさい、こうしなさいと指示したらいかんかね。なんかその人と寄り添うみたいな話し方が一番良いのでしょうか。

— そうなのです。寄り添うことが、なかなか出来ないのですよねえ。いつも難しさを感じています。

— 富田さんは今、どんなお仕事をいらっしゃるのですか？

富田：総合的な事務と経理。現場管理のアシスタントもしています。

— 何でもされるのですね。

富田：一人しか居ないので必然的にですが、いろいろな経験をさせていただき大変勉強になっています。

— 三和電業グループさんの中には外国のグループもありますが、どんな事業をやってらっしゃるのですか？

中村：中国の蘇州で、日系企業様の工場を主体に建築一式を請け負っています。又、日本からの依頼でパソコン業務もやっています。社員数は5、60人位で日本人は2人、ほとんどが中国人ですが、中国の人が一生懸命勉強して日本語を流暢に話すんですよ。本当に頑張り屋が多いです。

— 三和電業グループさんの理念に生き活きとして働くということが、掲げられていますね。

中村：会社の目的はそこなんです。人育てなんです。人が育って生き活きとして仕事をしたら、世の中の役に立つ。最終目的は社員それぞれが立派になってくれることなんです。

— 素晴らしいですね。まず社員が中心で、社員が立派になるというのが。

中村：社内で人を育てる、人材を育てる。で、皆が元気で立派になる。そして品質の高い仕事を通して社会貢献するという発想ですから。

— 人育てをされる時に一番大事にされているのは、どういう事ですか？

中村：よく言うのが全社員経営者だと。一年生であろうと二年生であろうと、経営者意識を持ちましょうと。一、二年生は今の仕事を覚えるのが精一杯だが、自分の意識を一つでも二つでも、上の人の立場まで高めて、その立場だとど

うするだろうかと考えるようになるとかなり成長します。

— ちょっと先の目標を持つということですね。

なるべく上を見れば見るほど視野が広がりますからね。未来志向で、そういうことを言い続けて皆も周りもそうやってきたら自分もと、そんな感じで組織を活性化し、経営者センスを持った技術者に。技術者、経営者の両方のスペシャリストを目標として少しずつ成長する。やろうという姿勢が大切。その為に研修を受けたりして、社内教育にも力を入れています。

— これから先、どういう会社で育てたいとか、お考えをお聞かせください。

中村：うちは大企業ではないから、会社を大きくしたいという目標ではなく、それぞれの各グループの専門性を活かして皆が、生き活きする会社を目指しています

— 今、御社は太陽光発電設備工事がメインと伺いましたが、これからこういう方面に進出とか、やってみようというお考えは？

中村：あるんです、それは。ぼやっとしていますが、要は環境貢献ですね。それが出来るような設備工事をターゲットにして行こうと。例えば風力発電とか、発電機とボイラーのセットで省エネとか。うちはメーカーではないから最新の技術製品を組み合わせる価値あるものにしてお客様に提供したいと思っています。

— 先を見通す力も必要なのですね。

中村：最近情報は氾濫していて、それも早いでしょ。富田さんは、しょっちゅうパソコンで検索して調べてくれて皆に教えてくれる。

富田：現場は営業ペースで忙しいので、少しでも早い情報を提供出来たらと。技術的な情報も集めて伝えたりしています。

いろいろ伝えたい気持ちはあるのですが、なかなか簡単にはできないものですね。

— 気持ちだけでは進めないし、気持ちが無いと何も始まらないですよ。

中村：そういうことですね。

— 今日は私たちのいのちの電話活動にも共通しているお話も色々とお伺いしました。

お二人とも、お忙しい中を長時間に渡りありがとうございました。今後とも、ご支援をよろしくお願いいたします。

(聞き手：芳野／入江)

わたしと
いのちの電話

相談員の声

長男が思春期の頃、反抗がひどく、対応に困った時期があった。息子と向き合うために何か良い方法はないかと探した折、あるカウンセリング講座に出遭った。今まで知らない分野、こんな世界があるのかと学ぶ内に何よりも私自身のカチカチの気持ちが楽になったことを覚えている。講座が終わり、もう少し学びたいと思った時、いのちの電話の相談員研修講座案内が目飛び込んできた。電話相談員が自分に務まるのかしら、思いながらも2年間の研修に魅かれ、申し込みをした。長丁場の研修会、同期生と親交を深め、学びには刺激と気付きがあり、楽しくもあったが、同時に自分の考え方の傾向、思い込み、価値観、コンプレックス等に向き合うしんどい時間にもなった。このしんどい時間は、実は息子と私の問題を同時に解決に導くきっかけになり、感謝するものとなった。

傾聴はなかなか身につかず、油断すると話したい、相手を操作したい気持ちが頭をもたげてきてしまう。3年目の相談員デビューした日、私は研修で覚えたての相槌を良かれと思って連発、話もしてしまい、相談者から「相槌やめて、うるさい」と怒られ、苦い出発となった。

それから15年、現在は、仏教でいう蓮花の座に相談者にお座り頂き、一段低い所から受け手が聴かせて頂くイメージで話を聞いてみるようにしている。相談者が蓮華座に座り上席にいると思うと、受け手は、以前よりいいか悪いかというこだわりを離れ、価値観に幾分か支配されずに、以前より相談者の心の思いに添って聴けるように思ったから。うまくいった時には、相談者が、今まで見えてなかったことに気付き、二人で深い所に進んでいけたりしているように感じる。

いのちの電話は一期一会の相談、各年齢層からかかり、相談内容も十人十色、出たとこ勝負である。失敗が人生を豊かにしてくれることを信じて、精一杯相談者の状況を想像しながら、お付き合いをさせて頂きたいと思う。

生きている限り、皆それぞれに悩む時がある。打つ手がなくなった時、人は初めて相談の場を利用するだろう。昨今の社会情勢では、誰もが相談者になり得る、そんな時代だと思う。私はこれまで随分と、相談者から、生きるヒントを得たり、エネルギーを貰ってきた。相談者の言葉に助けられた、という忘れられない経験もあった。いのちの電話相談は、相談者への一方的な奉仕ではなく、おそろくお互いにいいところがあって、私の中では「させて頂くボランティア活動」に昇格している。(M・A)

初めて「いのちの電話」のことを知ったのは、今から20年位前になる。新聞で目にして、こんな活動があるのだと…。その後4人の親も他界し、「死」について思うこともあり、人間ってあつけないなと思ったり、心がザワザワしたのを思い出した。又、身近な存在の人で自死に直面している人に接した経験もあり、再び「いのちの電話」に対して考える機会が出てきた。講座終了後、研修会もあるということで自分の学びにもなると思い、世間知らずの私には丁度いい位の思いで深く考えず受講した。それが今に至っている。

何年か前の公開講座で、鎌田實先生の「がんばらないけど、あきらめない」を、お聞きし今でも私の心に残っていて、ポチポチあきらめず継続している。

日々の環境、体力によってどこまで聴けているか？共感できているか？よりそいは？等、不安になる時もある。心を傾けて聴かせて頂いた時には充実感を覚えるし、反対におしかりを受けたりした時は、私は何をしているのだろうと徒勞を感じる時もある。今は月1回の班会や全体研修での学びで、新鮮な感覚を呼び覚ましていながら、心新たに受話器を持っている。自分がどれだけできるか？ではなく聴かせて頂いて自分がどのように変化してきたのか？人生観も変わりつつ、日々学びの場とさせて頂いている。基本には俯瞰しながらの傾聴を心がけている。もちろん「がんばらないけど、あきらめない」力を入れすぎず、これからも継続できるといいかなと思いつつ…。(H・M)

「いのちの電話」はあなたのご支援を必要としています

いのちの電話の活動は、多くの善意あるボランティアの無償の奉仕によって支えられています。眠らぬダイヤルの施設維持費、相談員研修費、広報活動など、年間800万円の資金が必要となっています。ボランティア活動である「いのちの電話」は、それを支える財政的基盤は大半が市民の、あるいは企業や諸団体からの寄付や、県等の支援金で支えられています。ひとりでも多くの方に資金ボランティアとして関わってくださいますよう、お願い申し上げます。

【寄付金】金額はご随意です。クリスマス、歳末など折にふれてご協力下さい。《お振込みは下記のいずれかをご利用下さい》

＜振込先＞

社会福祉法人香川いのちの電話協会
理事長 松岡 定幸

- ・ 香川銀行本店（普）1389129
- ・ 高松信用金庫本店営業部（普）4821464
- ・ 百十四銀行本店（普）1473589
- ・ 郵便振替 01600-5-9348

宮武則明プロフィール（2006.6より写真提供者）

1941年高松市生まれ。写真家。著書に「讃岐の町並」他9冊（讃岐写真作家の会刊）「ふるさとを訪ねて」がある。現在「ギャラリーMON」（高松市朝日町）に年2回作品展に出品。「ふれあいえんざ」「香川いのちの電話」などで撮影活動中。高松市円座町在住。

発行所 社会福祉法人 香川いのちの電話協会

〒760-8691 高松市中央郵便局 私書箱152号

電話 (087) 861-7065

E-mail kind@tiara.ocn.ne.jp <http://www.kind-kagawa.org/>

発行日 令和3年12月

発行人 松岡 定幸 編集 広報委員会/事務局